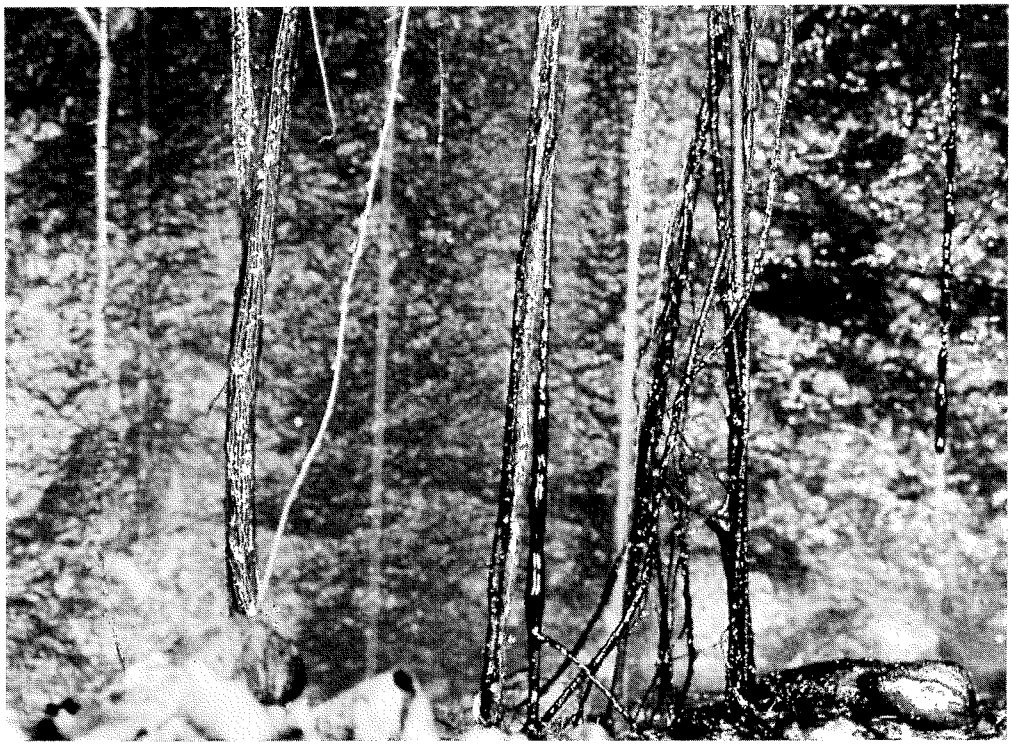
はくぶつかん　プラネタリウム　古民家園

あるむぜお

府中市郷土の森だより　No.24　al museo



武蔵野の風景 9　鍔山英次写真より　**湧水**

広大な武蔵野台地がようやく南につきるところに、多摩川に向かう長い崖(がけ)が続いています。この崖をハケと呼んでいます。

ハケ上の小道をたどれば、緑が濃くなった樹々の間からは、ハケ下の家並が見え隠れし、横たわる多摩丘陵の背には遠く富士や丹沢(たんざわ)の山々を望むことができます。府中から西へ、国立市境に近いところ、ハケ上の道から曲がりくねった小さな坂を降りていくと、ひとつの湧水(ゆうすい)を見つけることができます。

湧水は、台地に降った雨水が長い間に関東ローム層で濾過(ろか)され、礫層(れきそう)を通ってようやくハケのところで再び地上に現われたものです。こうした清冽(せいれつ)な泉は、かつてハケに沿って数多くあったはずです。だからこそ、何万年も昔から人々が住み始めたところもハケの近くだったのです。

その湧水も、府中ではこの西府町のものが数少ないひとつになってしまいました。身近なところに今も息づくささやかな自然を発見した喜びとともに、こうしたものをいつまでも残しておきたい気持にかられますね。　（O）

特別展

南武蔵の古墳

展示会案内

7月25日(日)～8月31日(火)

３世紀の末頃から約400年間は、列島の各地で古墳が盛んに造られた時代です。古墳は、日本古代国家成立の過程を明らかにする上で、さまざまな情報を私たちに提供してくれます。

多摩川の流域にも、大小さまざまな古墳があります。最近では、古墳の保存整備にともなう発掘調査例も増え、通説を覆す発見もされています。しかし、今、私たちが目にする古墳は全てではなく、人知れず姿を消した古墳も相当数あったはずです。

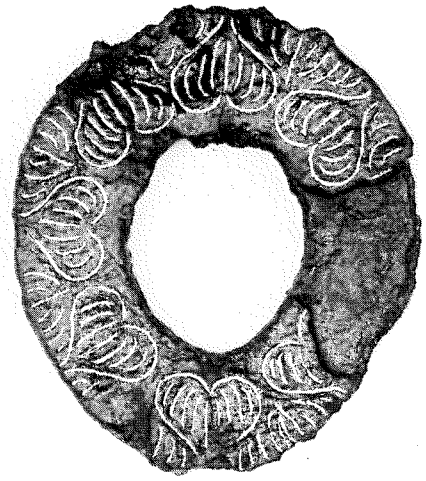
なかには、残された出土品によって、古墳の存在がうかがえることもあります。さらに、古墳の形跡が何もないところに、発掘調査によって再び姿を現すこともあるのです。

今回の展示では、南武蔵の主要な古墳の出土品によって、地域における古墳の出現、展開、変容、そして終末の様をながめ、他地域との関連や相違点を探ってみようと思います。

ところで、古墳の存在が知られていなかった府中にも、最近になって、３か所にまとまって小さな古墳があることがわかってきました。その一つ、分倍河原駅西側の一帯では、現在までに17基の古墳跡が見つかり、いわゆる群集墳を形成していたことが明らかになりました。高倉古墳群です。古墳跡といっても、横穴式石室が残り、直刀や鉄鏃、耳環、ガラスや水晶製の玉などが副葬されたものもあります。

本館にも、1928年頃、南武線の敷設工事中に、分倍河原駅西方の塚から出土したと伝えられる５振りの直刀が保管されています。長い間、古墳の副葬品と考えられながら、確証がありませんでしたが、古墳群の存在が明らかになった今、ここにも古墳があったことは間違いありません。最近、この直刀の防錆処理をするために、Ｘ線写真を撮ったところ、鍔の部分に銀象嵌による見事な文様があることがわかりました。都内では３例目で、高倉古墳群の性格を知るうえでも貴重な発見でした。周辺には、塚状の高まりが何か所かあり、古墳の数は将来さらに増加するはずです。

これらの古墳は、この地域に住んだ有力者たちの墓で、出土品や横穴式石室の形態から、６～７世紀に営まれたものと考えられます。その直後の８世紀になると、府中には国府が置かれ、武蔵国の中心地としての繁栄を迎えるのです。国府が府中に置かれた理由については、従来ほとんど手掛かりがありませんでした。小さな古墳ながら、国府設置直前の府中に群集墳が存在することは重要です。今回の展示によって、南武蔵の古墳の様子を知ることは、この古墳群を理解するためにも、国府の設置理由を探るためにも有効な手立てになるはずです。　（Ｆ）



象嵌の研ぎだしを終えた鍔

記念講演会

「文献からみた５・６世紀の武蔵」

講　師　鈴木靖民氏
（国学院大学教授）

日　時　8月8日(日)午後２時～４時

会　場　本館大会議室

考古学入門講座

武蔵国府のはなし その5

＝国府の住人＝

国府を中心とした集落にはどんな人たちが住んでいたのでしょうか。すでに紹介したように、府中第一小学校の南側では「大目館」と墨書きされた土器が出土しているので、周辺に国司の館が存在したことが想像できますが、時期ごとに様々な役人の住居もあったはずです。発掘調査では掘立柱建物跡が大きな溝で囲まれた所もいくつか見つかっていて、これが国司の館であったのかも知れませんし、政庁から離れて設置された役所とも考えられます。

しかし、発掘される竪穴住居跡の数が示すように、国府に居住した人の大多数は竪穴住居に住む庶民階層なのです。竪穴住居跡からは鎌や鋤などの農具、斧や鋸などの工具類、矢じりなどの武器も出土しますから、農作業に携わる人はもちろん、役所の建設に駆り出されたり、兵士として国府を警護する人たちもいたのでしょう。さらに、竪穴住居跡の中には小鍛冶が行われたものもあり、各種の手工業生産に携わる人々がいたことも確かです。

＝崖線と井戸＝

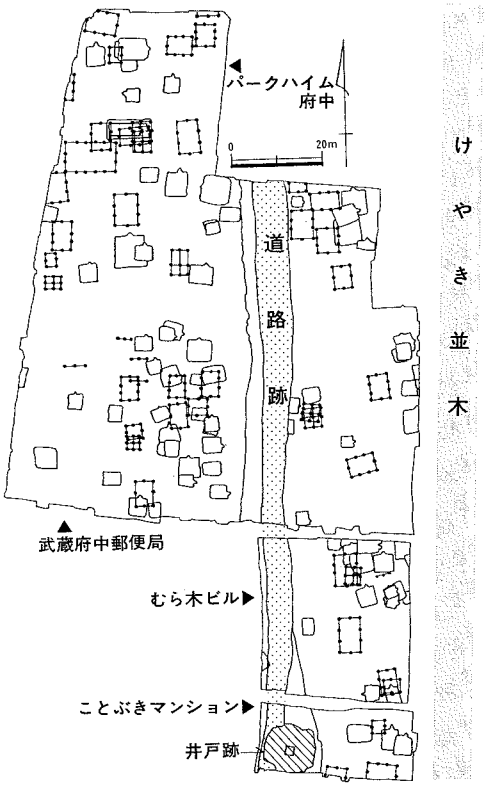
国府を中心として展開した集落の特徴は、崖線に沿って東西に長く広がっていることです。これは、崖線下の湧水を生活用水として利用したためで、集落の広がりは、生活用水に大きく左右されていたことがわかります。

しかし、政庁推定地の北方では崖線から最大1㎞の所まで竪穴住居跡が存在し、そこの住人が崖線の湧水を利用したとは考えられません。ここでは大型の井戸が掘られ、共同利用されていたようです。寿町1丁目で発掘された井戸は、まさしく道端の共同井戸で、この地区が居住区として計画性をもって営まれたことを示しています。

＝都からの道、都への道＝

井戸の傍らの道は現在のけやき並木に沿うように走っていますが、これより1㎞程西にも、直線に延びる幅12mもの道路が見つかっています。この延長は、北方の国分寺市域でも見つかり、さらに北を目指しているようです。大規模で、計画性をもって作られていることから、国家が設置した官道と考えてよいでしょう。

武蔵国は宝亀2（771）年まで東山道に属していました。そのルートは都から信濃国（長野）・上野国（群馬）・下野国（栃木）を経て陸奥へ至るもので、上野から枝分かれした道が武蔵国府に達していました。発掘された道は、まさしく上野国方面に向かっていて、これが東山道であることは間違いなさそうです。こうした官道は、国司が任国へ赴く道であり、都からの情報や文物がもたらされる道でした。また同時に、地方から都へ税が運ばれ、あるいは防人たちが遠く九州へ向う道でもあったのです。　（F）



寿町1丁目の井戸とその周辺

多摩の運搬具 —府中の背負梯子—

後藤　廣史

背負梯子のことを、府中ではショイバシゴと呼んでいます。木製の枠に負い縄をとりつけて荷物をくくり、文字通り「ショウ」のです。

＝大きな府中の背負梯子＝

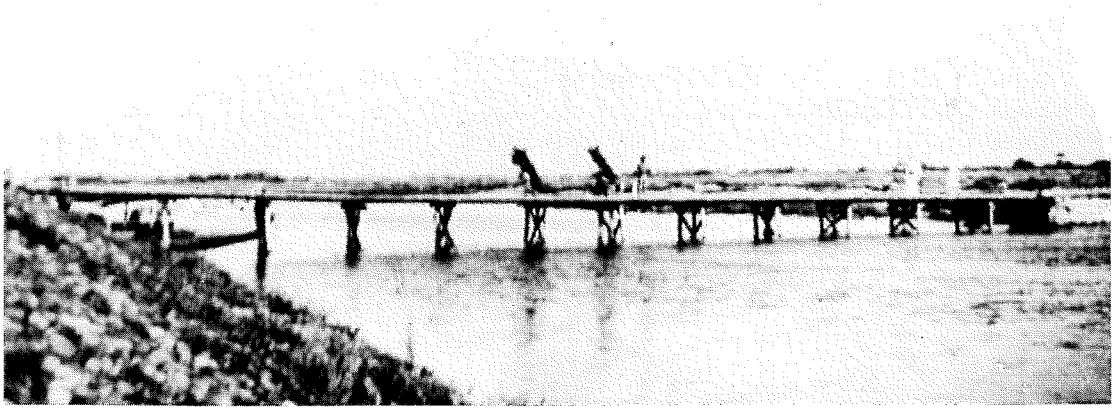
府中の背負梯子は、高さ170～200cmもあり、人の背丈よりも高い大型のものです。先般刊行された関東民具研究会編「南関東の運搬具—背負籠・背負梯子・天秤棒—」によれば、府中に限らず立川、清瀬といった多摩地区でも、同様の背負梯子が報告されています。同書で報告された神奈川、千葉、埼玉の背負梯子のうち、例えば神奈川県平塚市が80～150cm、千葉県市川市が約100cm、埼玉県秩父郡が110～115cmというように、多摩地区の高さが170～200cmという大型の背負梯子は〝特異な〟というよりは、多摩地区においては〝一般的〟な大きさといえるでしょう。このことは多摩の地域性を物語るものと捉えられます。

＝背負梯子の使われ方＝

ここで多摩地区の背負梯子使用の事例を、前書「南関東の運搬具」の中からご紹介してみます。

「田で脱穀した籾４斗くらいを詰めた麻袋や、刈り取った蕎麦を束ねたまま、ショイバシゴに綱でしばって背負ってきた」(立川市)、「ヤマからソダ（薪になる枝）を運んだり、屋根材となるカヤを運んだりするのに使ったという」(国分寺市)、「畑から麦や大豆などをはこぶときに背負梯子を用いる」(府中市）など、ソダ、カヤ、蕎麦あるいは麦束、稲束といった、軽くてしかも大量に担えるものを背負梯子で運んでいます。また「野川沿いのドブッタを所有していた旧国分寺村の家では（中略）刈り取った直後の稲を運ぶのに使っていた」(国分寺市)、「収穫した稲束を、低い水田から家のある台地上まで運ぶためにショイバシゴがよく利用された」(清瀬市）というように、目的地までリヤカーやテグルマ（大八車）が入れないために、そこからの運搬に背負梯子を使ったというのです。このことは背負梯子だけを考えるのではなくて、リヤカーあるいはテグルマとの関連で背負梯子を捉える、また運搬具全体を考察するという重要な民俗的視点を示唆しています。

府中では、家々の入り組んだ道にしろ、畑の中をまっすぐに伸びた道にしろ、田んぼの中の曲がりくねった道にしろ、テグルマ１台は通れる幅をもっていた、といいます。また、甲州街道沿いには多くの車大工がいて、多くのテグル



背負梯子でソダを運ぶ・昭和５年頃（『写真集 むかしの府中』より）

マが作られ、家によっては2台、3台とテグルマを持っていたという話もあります。それだけテグルマの需要があったわけです。

このように考えていくと、目的地の田んぼや畑のすぐ近くまでテグルマを曳いていくことができるという府中にあって、積極的な背負梯子の使われ方はどのようなことだったのかが、当然問題になってきます。

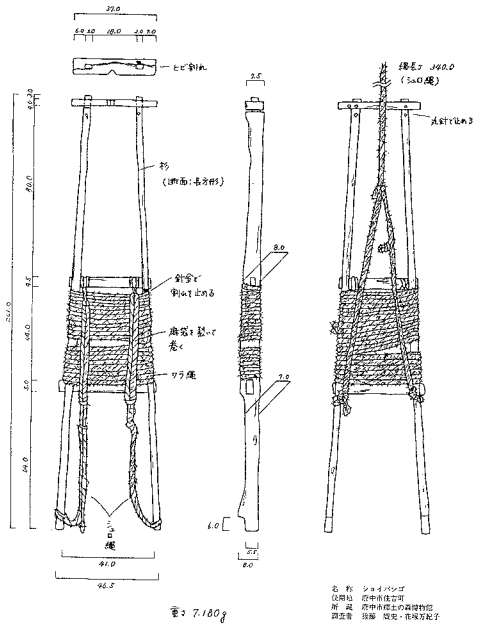
＝ソダ運びの主役・背負梯子＝

農家にとって、12～3月は農閑期で、モヤワケ（薪とり）とクズハキ（肥料のための枯葉集め）の仕事を行いました。新年を迎えると、1月17日が山はじめで、雑木林に御神酒とオサンゴ（米を半紙にくるんだもの）を供え、この日からまたクズハキ、モヤワケが始まります。この時、クズハキカゴや背負梯子、そしてテグルマ（後にリヤカー）が使われました。

薪は1年に1反ほどの材を必要とし、クズで4、5反は必要だったといいますから、雑木林は農家の生活にとって必要不可欠な存在でした。ナラ、クヌギを主に、クリ、サクラ、エゴ、ホウなどの雑木が成育する雑木林で、主に風呂焚きに使う薪を50～60把つくると、ソダが12～13把できます。薪は長さ2尺、1把2尺5寸の束で、重さ4貫（約16.5kg）ほどもあり、男で5把、女で3把、背負梯子につけて運んだといいます。ソダは長さ5尺、1把2尺5寸束の細い枝で、1日1把は飯焚き、イロリなどで必要としたため、1年間の消費量たるやたいへんな量となり、これを冬場に調達するわけです。

府中では浅間山（海抜80m、市北東部）や、現在の東芝府中工場周辺（市北西部）に雑木林が広がっていましたが、多摩川沿いの四谷、中河原あたりの家では、対岸のムコウヤマ（多摩丘陵）にヤマを持っていて、薪やソダを運びました。是政の渡しに架かる仮橋に、そのソダ運びの様子が見える写真が残っていて、自分の背丈以上にソダを高く積んでいることがわかります。

ところで府中市郷土の森博物館で所蔵している背負梯子は7点で、いずれも市域を東西に横断する立川段丘崖（通称ハケ）を境にして、ハケ下つまり稲作農家で使用されたものです。稲束や麦束（裏作）を運ぶのに背負梯子は使わず、専らソダ運びに使ったという聞き書きもあることから、ハケ下にあっては、この200cm程もある大型の背負梯子は、ソダ運びに専ら使われたといってもいいでしょう。またハケ上でも、浅間山やその周辺に雑木林が広がっていたことから、ハケ下と同様にこの背負梯子が活躍したと予測できるでしょう。



本館所蔵の背負梯子より

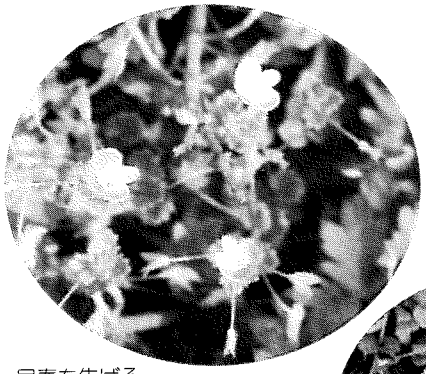
本稿をまとめるにあたって、前掲書「南関東の運搬具」を参考にしました。同書は東京都・神奈川県・埼玉県・山梨県のいくつかの博物館・資料館で学芸員などとして勤務している者が、それぞれに資料を持ち寄り、図録集としてまとめたものです。これにより広い範囲にわたって比較が可能になったことを付言します。

※参考文献

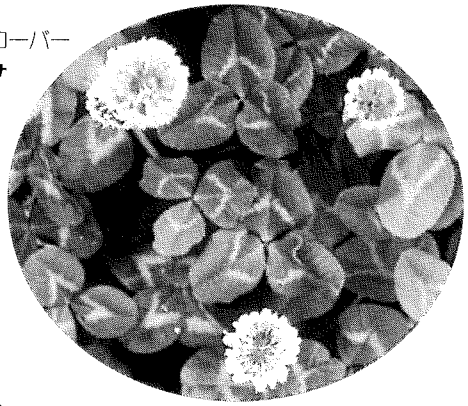
関東民具研究会編「南関東の運搬具―背負籠・背負梯子・天秤棒―」（『府中市郷土の森紀要第6号』所収、1993年3月）

府中市史編さん委員会編『府中市史 下巻』府中市、1974年3月

カメラアングル



早春を告げる
オオイヌノフグリ



三つ葉のクローバー
シロツメクサ

水田にへばりついて
ムラサキサギゴケ

郷土の森がケヤキ並木の新緑と
満開のツツジの花で彩られる頃、
こんな草たちも、
見つけることができました。

コンペイトウ
のような実
ケキツネノボタン

まず黄色
の花が咲く
ヘビイチゴ

春紫苑とも書く
ハルジョオン

種を吹いて
遊んだ
タンポポ

春の七草の
ゴギョウ
ハハコグサ

▲セイヨウアブラナ(ナノハナ) ▼カラスノエンドウ

▲ナズナ

【平成4年度の利用状況】

(H4.4.1～H5.3.31) 開園日数339日

区分		有料		減免	合計
		一般	団体		
入園者	大人	135,351 人	11,888 人	6,772 人	154,011 人
	子供	40,550	27,954	1,669	70,173
	小計	175,901	39,842	8,441	224,184
博物館入館者	大人	37,092	7,572	2,862	47,526
	子供	15,823	17,140	232	33,195
	小計	52,915	24,712	3,094	80,721
プラネタリウム観覧者	大人	54,489	4,926	868	60,283
	子供	27,506	19,082	1,407	47,995
	小計	81,995	24,008	2,275	108,278
合計		310,811	88,562	13,810	413,183

【平成４年度 寄贈・寄託資料一覧表】

■寄贈資料

	寄贈者	資料名	分類	数量	備考
1	松本次郎	岡持ち・きみ箱	民俗	2	
2	林　繁	行季・簞笥他	民俗	55	
3	小勝誠一	万石とおし・土ならし 他	民俗	10	
4	青木　良	ひな人形・五月人形	民俗	2式	
5	有山義夫	魚籠 他	民俗	4	
6	大谷　勉	灰釉陶器皿 他	考古	1括	市内片山遺跡出土 他
7	島津毅一	台秤・下駄	民俗	2式	
8	西槇俊之	炭火アイロン	民俗	1	
9	高橋和子	編機	民俗	2	
10	米須信子	伸子張	民俗	1括	
11	小沢嘉一	足踏み回転脱穀機 他	民俗	3	
12	加治義和	古書籍（万歳雑書）	歴史	1	
13	日橋　茂	〃（新田義貞と分倍河原乃戦）	歴史	1	昭和10年刊
14	横山次郎吉	〃（新選規矩階梯 他）	歴史	3	
15	比留間吉郎	馬鍬・犂	民俗	2	
16	大塚義雄	風呂鍬	民俗	2	
17	川口　弘	御櫃・御櫃入れ	民俗	2	
18	白井フク	クルリ棒	民俗	1	
19	望月雅司	土器片	考古	1括	
20	鈴木次郎	つるべ滑車	民俗	1	
21	鴨志田静男	太鼓銘拓本	民俗	2	府中新宿講中・明治25年
22	宇田川善太郎	刺又	民俗	1	府中町消防組

■寄託資料

	寄贈者	資料名	分類	数量	備考
1	今井元忠	板碑	考古	1括	長福寺出土

＝最近の発掘調査から＝

今回は、府中市内ではじめて見つかった、方形周溝墓について紹介します。

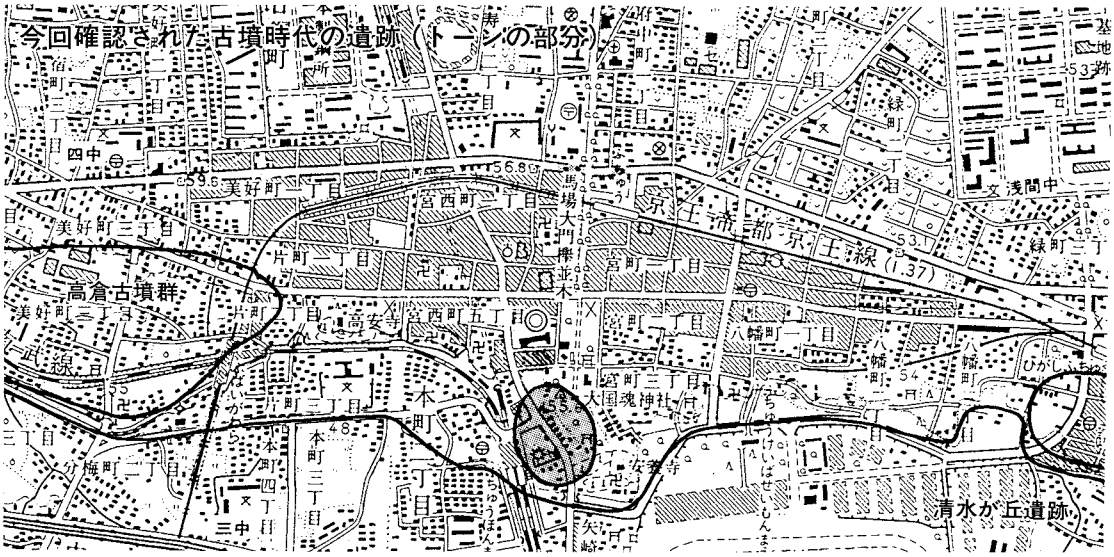
３世紀後半から７世紀の間、列島の各地で盛んに古墳が造られた時期を古墳時代と呼んでいます。古墳とは高く土盛りをした墓のことですが、関西や中国、北部九州地方では、これより前の弥生時代から墳丘墓と呼ばれるものが造られました。古墳のような高い土盛りをせず、石室を築くこともほとんどありません。この墳丘墓がやがて古墳へと発展・移行するのです。

西日本でこうした墳丘墓が造られた頃、東日本では方形周溝墓と呼ばれる墓が営まれていました。溝によって四角形に区画された内側に遺体を埋葬したもので、低い盛り土があったと考えられています。東京周辺の南関東では、４世紀後半から古墳が出現しますが、方形周溝墓は古墳時代に入っても造られ続けました。

今回、大国魂神社とＪＲ府中本町駅の間の府中街道周辺で、２つの調査地区から３基の方形周溝墓と考えられるものを発見しました。その一つは、四隅のうちの一つと二辺が見つかっています(写真)。 溝は幅約２ｍ、深さ0.6ｍでした。後世の削平などによって溝の深さは浅くなっていると思います。東西約15ｍ、南北約10ｍを発掘できましたが、大部分が調査区域外に広がっているため、全体の大きさや人を埋葬した施設については明らかでありません。しかし、溝の中からは古墳時代前期（４世紀）の壺形土器や甕形土器の破片が出土していることから、この時期の遺構であることは確かで、方形周溝墓の一部と考えてよいでしょう。

これまで、古墳時代の遺構や遺物は白糸台や清水が丘、美好町などで発見されていますが、本町周辺でははじめての確認です。府中の遺跡は、奈良～平安時代の武蔵国府関連のものが中心になるため、古墳時代のことはあまり知られていないのが現状です。今後、この溝の続きの部分が調査されれば、方形周溝墓と断定することも可能になり、国府設置以前の府中の様子を解明する調査データになることでしょう。

（本町・大熊ビル２地区の調査から　和田）



あれこれ　農具の周辺

―田植えをするには―

苗代で育てた稲の苗を水田に移し植える「田植え」は、日本の伝統的な初夏の風物詩の一つといえます。

府中のあたりの田植えの季節は、全国的にも遅く、6月中下旬に行っています。かって水田の裏作に麦を作っていたことや、耕起や代かきに活躍する馬の手配などの関係だといわれます。

さて、田植え機がまだ登場しない頃、早く正確に無駄なく、広い面積を植えていくのはたいへんな作業でした。何人かが列になって泥のなかに入るのですが、植える地点をすばやく知るために、さまざまな道具が使われたのです。大きな定規のようなものを田んぼに入れたり、畦から反対側の畦まで縄を張ったり、三角か六角形の筒のような形のものを転がしながら穴をつけたりしました。地方地方で特色ある田植えが行われたようです。

府中では、縄（印縄）も使われましたが、これは田植えを機械化する直前のわずかな期間で、昔は何も使わずに行っていた家が多かったようです。「縄や木枠を使っている暇などなかった」という、郷土の森近くの農家の人は「オイッパカ」と呼ぶ当時の方法を教えてくれました。4人くらいが1グループになって、リーダー格の先頭の者がカニのように真横に進みながら植えていく。それを追いかけるように後の列を次の者が植えていく。みんなが追いかけながらジグザグに進んでいき、あっという間に終わってしまった、と。もっとも、これには優れた技術とカンが必要であって、手先の器用な女性の方がうまかったとか。男はもっぱら代かきの馬に手間取っていたそうです。

郷土の森の体験学習「こめっこクラブ」の田植え（写真）は、30cmごとにリボンをつけた印縄を張ってやっています。　（O）

インフォメーション

郷土の森の 新 刊 紹 介

■企画展「神酒口―岡村コレクションを中心に」図録　B5・1300円

正月の飾り物で、竹・経木・紙などの造形「神酒口」の知られざる美にせまります。

■特別展「もえぎ色のうわぐすり―緑釉陶器の美と製法」図録　変型・500円

平安時代に盛んに作られた緑釉陶器の数々を全国レベルで紹介し、その製法も探ります。

■企画展「ハケの自然とくらし―鍔山英次写真展」図録　A4・1000円

多摩地域のハケ（崖線）に今も息づく美しい自然と人々のくらしをとらえた写真集。鍔山氏、井出孫六氏、立松和平氏の文も掲載。

■府中市郷土の森紀要　第6号　B5・2200円

「南関東の運搬具―背負籠・背負梯子・天秤棒―」「府中市郷土の森のクモについて」「八王子市上柚木産・上総層群平山層中部の貝化石」「物語・縁起のなかの武蔵国司」「旧弥勒寺跡出土の中世遺物」の研究論文掲載。

あるむぜお　第24号

al museo　イタリア語
"博物館で"　"博物館にて"の意

発行日　1993年6月20日

発行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921